

「在日特権を許さない市民の会」について

『ロシア革命における民族問題』（未発表）より

2011年 南雲

本項¹をしめくくるにあたって、最近跳梁している「在日特権を許さない市民の会」（在特会）について述べておく。在特会は、「2006年末結成。『行動する保守』を掲げてネットを中心に会員を増やし、現在8700人。東京の本部のほか全国25支部を構える」²という。本年（2011年）3月24日、対馬市議会は「『外国人参政権付与法案』に反対する意見書」を採択した。「意見書」のもとになったのは、在特会の陳情書であり、「反対決議の『推進力』となったのは、昨年12月に発足したばかりの日本会議長崎・対馬支部の存在で」³あるという。つまり、「日本最大の保守・右派団体で」（同）である日本会議と在特会が連携したのであった。また、関西においては、在特会による朝鮮初級学校などへの攻撃が繰り返されている。ここでは、在特会を批判する視点に限定して述べる（急遽書いたもので、粗雑だということは了承願いたい）。

秘密投票の普通選挙を根幹とする代議制民主主義は、投票者と政党の関係が不透明であり、恣意化するという困難を抱えている（制限選挙においては、政党がどの階級・階層の利益を代表しているかが、比較的分かりやすい）。当選した議員は、彼・彼女に投票した者からの拘束にしばられない。他方、議員が汚職などの罪を犯しても、その議員に投票した者の責任が問われることはない。つまり、責任関係が希薄化するとともに、自分の利益が代表されていないという不満が積もる。その不満をいなく大衆の一部は、民主主義そのものの攻撃に至り（しばしば「言論の自由」「表現の自由」の旗印のもとに）、また、自ら行動を開始するに至る。在特会は、このような一部の大衆を代表している。読者はお気づきであろうが、このような現象は、ファシズム生成にとっての一条件に他ならない。ファシズムは、単なる民主主義の否定ではなく、民主主義が生み出す民主主義の否定である。

さらに、インターネットを利用している点に、在特会の今日性がある。あるネットユーザーは、次のように述べている。「ネットでは双方向のやりとりで正しい意見が残る。新聞やテレビは、初めから結論ありき、だと感じる」（前出『朝日』連載）、と。「大衆社会化」「脱階級化」「脱イデオロギー化」と言う言説、「勝ち組・負け組」という言説が示す状況と、広まる閉塞感・危機感の中で、彼・彼女らは、マスコミからも疎外されている「サイレントピープル」だと感じているのである。無責任性を土台とした「言論の自由」が保障されているネット空間において、情緒的な主張（「日本はなめられている」など）と「他人の不幸は蜜の味」的な俗情によって排外主義を煽ってきたのが、いわゆる「ネット右翼」であった。それは、バラバラの個人が、普段話題にしづらい時局的政治を語り、一種の連帯感を味わう場となった。これに対して、在特会は、自らの暴力的行動を動画配信して同調者を集めている。この全国性と瞬時性に基づき、バラバラの個人が行動に参加することで、実際に「仲間」と出会うのである。在特会は、より強いアイデンティティの形成を志向する右翼的無党派層の受け皿になっていると考えられる。

ルナンは、「過去における共有すべき栄光と悔悟の遺産」がナシオンを結び付け、「ナシオンの追憶に関して

1 「『ロシア革命における民族問題』 第三節 ユダヤ人問題とレーニンの理解」

2 『朝日新聞』2010年4月29日～5月3日連載「扇動社会」

3 『週刊金曜日』2010年4月30日・5月7日合併号

は、追悼は勝利以上に価値あるもの」だと述べている（『ナシオンとは何か?』）⁴。日本のナショナリストにとって、アジア太平洋戦争の敗北こそ、この「価値あるもの」に他ならない。しかし、現在の危機的状況の原因を、「戦後レジーム」に求めた安倍政権は、失敗した。いわゆる戦後民主主義こそ、戦後の主流ナショナリズムの基盤だったからである。戦後民主主義は、一方で一体的「国民」の物質的基礎を形成し、他方で米国との協調を通して大国化することを可能とした。これを揺るがしたのが、小泉政権であった（新自由主義政策による諸階層分断と格差拡大、極端な親米主義によるナショナリストの分裂）。

戦後民主主義は、米国の世界戦略の一環として、一方では天皇制度を温存するとともに、他方では、旧植民地人の切り捨てと琉球弧住民の売り渡しによって成立した。（いわゆる「戦後革命」の圧殺をバネとして）。日本政府は、旧植民地人に対し、追い出し（強制送還のみならず、「帰国事業」への好意的対応などを含む）と「同化」の政策を遂行してきたが、それらを拒否し、現在まで「在日」としての生活を維持してきた人々がいる（それらの人々を差別する法律・法令が施行されてきた）。戦後民主主義が破綻するに伴って、「在日」問題（と沖縄問題）が焦点化するの、いわば必然である。在特会の排外主義的行動は、このような事態に対する一つの回答なのだ。

在特会を含む右翼勢力は、民主党政権を「左翼政権」「社会主義政権」と呼んでいる。西村真悟は、自らのブログで、「東アジア共同体」「外国人参政権付与」「夫婦別姓法案」をとりあげ、「これらの論理が向かうところは、我が国の国家と国民と家族の解体であり、これこそ、コミンテルンが共産主義革命のために各国に指令した方針そのもの」とし、「コミンテルン指令を完成させようとする民主党政権」を非難している（この論法を用いるならば、明治天皇が発布した「教育勅語」は「忠孝」を強要した、「忠孝」を説いたのは儒家である、従って明治天皇は中国人の手先だ、ともいえよう。）ナショナリストにとって最悪のシナリオは、「外国人参政権付与法」成立後に、中国人が大挙して日本に移住してくることなのだ（「在日」の知人も、この点を指摘していた）。

「愛国主義者はならず者の最後の避難所」（サミュエル・ジョンソン）だという。今日のナショナリズムは、多

⁴ エルネスト・ルナン（1823～1892）『国民とは何か』（インスクリプト1997）ルナンは「ネイション」の定義についての有名な言説で知られる。1882年にソルボンヌで行った "Qu'est-ce qu'une nation?"（国民とは何か?）という講演で示されたその内容は、かつてフィヒテが講演『ドイツ国民に告ぐ（ドイツ語版、英語版）』で示した「ネイション」とは異なるものであった。フィヒテの「ネイション」概念が、人種・エスニック集団・言語などといった、明確にある集団と他の集団を区分できるような基準に基づくのに対し、ルナンにとっての「ネイション」とは精神的原理であり、人々が過去において行い、今後も行おう用意のある犠牲心によって構成された連帯心に求められるとする。とりわけ、この講演の中で示された「国民の存在は…日々の国民投票なのです」という言葉は有名である。（wikipediaより）

様な現われ方をしている（例えば、『坂の上の雲』⁵もその一つ。半沢英一『雲の先の修羅』⁶参照）。

しかし、一般的に言えば、ナショナリズム（民族＝国民主義）は、内部に対して均質化を求め、外部を区別するという本質的特徴を持つ。その意味では、他のネイション（あるいは「非国民」も含む）に対する強迫観念を常に伴っている。日本におけるその極端な発現が、関東大震災時の朝鮮人虐殺であった（その構造は、ロシアのポグロムに酷似している）。この時代には、「50円50銭」が示すごとく、言語によって朝鮮人は区別されたことに留意しておく必要がある。しかし、今や大部分の在日朝鮮人は、日本語を生活語としている。

グローバル化が進行する中でのナショナリズムの高揚、これを大澤真幸は、「ナショナリズムの最後・後の波」⁷と呼んでいる。いわば、ネイションが意味低化するに従って、エスニシティが発現しているのである（その一つの現われ

『坂の上の雲』と司馬史観 岩波書店・1890円

著者
中村 政則さん

世に司馬遼太郎論は多い。しかし近現代史の研究者に、司馬を批判する向きは少ない。なぜか。「司馬さんはよく調べているし、膨大な読者がいる。批判するには相応な勇氣と力量がいるから」という。日露戦争は、ロシアの侵略に對する日本の祖國防衛戦争だった。明治は明るく、昭和は暗かった……。そうした「司馬史観」の基礎ともいえるべき認識に、『坂の上の雲』発表後明らかになった資料や研究成果を駆使して異議申し立てをした。

司馬が多くの読者を歴史の世帯へと導いた功績は、認めている。「優しい作家だった。自分の役割は読者を喜ばせて元気を与えることだと考えていた。時

歴史家からの異議申し立て



おり筆が滑るのも、サービス精神が旺盛だったからでしょう。だが批判は鋭い。軍備拡張のため「飢饉予算」を組んだ明治政府に對して、当時の人々から不満はほとんどなかったとした司馬に對し、具体例を挙げ反証

しながら「明治ナショナリズムを強調したかったのである。うが、ここまで書かれると、いい加減にしてほしい」と、言わざるを得ない。資料の扱い方について「信じられないような杜撰な箇所が随所に見られる」と断る。

司馬は小説家、フィクションを扱ひるのは当然で、史実との違いを批判するのは筋違いでは？ そう問うと、「歴史家が立ち入るべきことではない」という指摘は確かにあります。しかし、司馬さんは例えば『坂の上の雲』について「史実に拘束されない」と書いています。読者は史実とみてしまふ。圧倒的な影響力を持つ作家だけに、フィクションが史実として浸透してしまう。一橋大で長年教鞭を執り、現在は名誉教授、日本近現代史の専門家としての危機感が執筆のエネルギーとなった。刊行1カ月で3版を重ねるなど好評で、熱心な司馬ファンにも読まれ、激励もあるという。「司馬ファン」の層の厚さを改めて感じました」

【原泉俊雄 写真も】

⁵ 『坂の上の雲』司馬遼太郎 産経新聞 1968～1972連載 『映画プロデューサー・山本又一朗氏が『文學界』（文藝春秋）[2015年]11月号のインタビューで、挫折した企画でいちばん思い出に残っている作品として『坂の上の雲』をあげ、司馬に映画化権の獲得交渉に出向いたエピソードを披露している。/アポなしで大阪に行き「1週間や10日ぐらいだったらお待ちしますから、ぜひお時間をください」という山本氏の熱意に押されたのか、司馬は山本氏を自宅に招き入れた。当初30分という約束だったのが「3時間40分もの大論争」になったという。/というのも、司馬が映像化を強く拒否したからだ。/「山本さん、私はミリタリズムだとかナショナリズムというのは賛成できないんです。人は住民の単位で生きていけばいいと思っています」「線を引いてここからが自分の土地、向こうがあちらの国、その結果、奪い合いをしてどっちが得したとか損したとか、そのために兵をあげてどうするとか、そういう話はストーリーだから書きますけど、それを映画なんていうものにされたら、影響力が大き過ぎて、いろんな人がそういうものに血氣盛んになられても困るんです」/こうした司馬の言葉に説得力を感じながらも山本氏は、現代の若者は生きる目的さえなくしている。『坂の上の雲』の時代は一個人が天下国家を動かした、一個人が重要だった時代だ。だから「現代の若者に、おまえひとりて国が変わるんだよ、己の力をちゃんと見つめ直せ、と言いたいんです」と、国ではなく個人を描きたいのだと食い下がる。/この山本の切り返しに司馬は「口の立つ方ですな」と感心するが、それでも司馬の意志はかたく、「山本さん、お願いします。他にもいっぱい書いた小説がありますから、他のものに目を移してください。『坂の上の雲』は一切やらせるわけにはいかない。ノーです」とキッパリ断られたという。/司馬自身、たとえば『「昭和」という国家』（日本放送出版協会）のなかで、「この作品はなるべく映画とかテレビとか、そういう視覚的なものに翻訳されたくない作品でもあります。/うかつに翻訳すると、ミリタリズムを鼓舞しているように誤解されたりする恐れがありますからね。/私自身が誤解されるのはいいのですが、その誤解が弊害をもたらすかもしれないと考え、非常に用心しながら書いたものです」』酒井まど（webリテラ 2015.11）

⁶ 『雲の先の修羅』 半沢英一 東信堂 2009/11

⁷ 『ナショナリズムの由来』 大澤真幸 講談社 2007/6

が、移民排斥運動)。在特会の運動も、単なる反動ではなく、世界的傾向の中で位置づけなければならない。

上記したように、ナショナリズムにおける強迫的な差別化衝動は、内的な均質化・平等化という理念（幻想）とメダルの両面の関係にある。ここでは、ネイションがゲマインシャフト⁸として観念される。身近な例をとろう。オリンピックやワールドカップにおいて、同じ時にまったく知らない者同士が、「ニッポン」と唱和する。そして、彼・彼女らは、同じ時に国内外の日本人が「ニッポン」と声援していることを知っている（あるいは、そう思っている）。その時、個々人は抽象化され、感情の同時共同性（一体感）が生まれる（錯覚なのだが）。この一体感が実体化されれば、一種のゲマインシャフト（擬制）として現象するのである。この構造は、マスメディアの発達なくしては、ありえなかった。とりあえず、「ぶちナショナリズム」（香山リカ）は、「ぐらんナショナリズム」と万里の長城によって区切られているわけではないことを、確認しよう。

個々人の抽象化は、外部に対しても働く（ステレオタイプ化）。この傾向は、グローバル化によって増進する。内的均質化・平等化という幻想の呪縛は、自分たちの生活条件の悪化が——実は、資本主義とブルジョア政府によってもたらされているのであるが（資本家たちが労働者のために利潤の一部を与える余裕が少なくなり、また、政府が新自由主義的政策を遂行した）——、「外部の者」による受益の篡奪の結果であるかに感じさせる。

ナショナリズムの対極にあるかに装う多文化主義は、諸文化の平等な共存を唱える。しかし、それは、文化的差異を本質的なものとする理解と、諸文化の純粋性の保持を含意しており、レーニンが喝破したごとく、民族的隔壁の強化をもたらす。多文化主義者は、しばしば次のように言う、「マイノリティの民族性を尊重するのなら、我々の民族性も尊重せよ」と（「逆差別」論と似た言説）。多文化主義が想定した諸文化が共存しうる空間は、現実性を持っていないからして、「尊重」の規準は恣意的・主観的なものにしかない。

他方、「多文化主義が過度に平坦で均質な空間を想定したことの実践的な帰結は、セキュリティ水準の上昇への強迫的な要求である〔国家権力による情報管理、市民参加による監視カメラの設置、等〕。……多文化主義的な——理論上の——徹底した寛容は、実践上の徹底した不寛容と——つまり他者の排除と——セットになっているのである。隣人に対して寛容になるために、予め、許容しうる程度に隣人の多様度を圧縮しておくこと、これがセキュリティの強化の意味である」⁹。「在日特権を許さない」ということは、「特権」を要求しない「在日」は「許す」という論理になる。しかしながら、上記したように、「特権」「許す」は無規準であり、「多様度の圧縮」は

⁸ ゲマインシャフト→ゲゼルシャフト（日本大百科全書 小学館） Gemeinschaft ドイツ ドイツの社会学者テニエスがゲゼルシャフトと対置して用いた語で、共同社会という訳語があてられ、ゲゼルシャフトとともに社会学の基本概念として用いられている。彼によれば、社会を成り立たせるのは人間の意志であるが、これは目的と手段との関係において本質意志と選択意志とに分けられ、本質意志に基づいて成立するのがゲマインシャフトである。選択意志が一定目的の達成のための合理的な手段の意識的な選択を意味するのに対して、本質意志は、人間の本質そのものの表現である。そこから生じる行為はそれ自体目的として欲せられ、ほとんど合理的に考慮されることなく、無意識的な気分や親切として個人に現れ、他者との一体感や慣習あるいは宗教として社会的に実現される。したがってこのような本質意志に基づくゲマインシャフトは、利害の一致に基づく一面的ないわば人工的なゲゼルシャフトとは異なって、人間の本質的な結合として、それ自体有機的な生命をもつ実在と考えられ、交換や売買や契約などの入り込む余地はなく、そこでは人々は全人格をもって感情的に融合し、親密な相互の了解のもとに運命を共にする。したがってそこでは、ときに人々が互いに対立することがあっても、なお人々は本質的には結合している。テニエスは、このようなゲマインシャフトとして、血縁に基づく家族、地縁に基づく村落、友情に基づく都市をあげる。/そしてテニエスは、このようなゲマインシャフトと、それに対置されるゲゼルシャフトを、単に社会の類型概念としてのみでなく、社会の歴史的な発展を示すものとして用い、ゲマインシャフトの時代にゲゼルシャフトの時代が続くと考えた。この考えは今日では「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」という図式で社会学に受け入れられている。→ゲゼルシャフト〈居安正〉【本】杉之原寿一著『テニエス』(1959・有斐閣)▽テニエス著、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』上下(岩波文庫)

⁹ 『ナショナリズムの由来』 大澤真幸 講談社 2007/6

極端へと向かう蓋然性を持つ。そして、国家の許容度と大衆の許容度とにズレが生じ、国家が寛容すぎると大衆が感じた時、大衆の一部は自ら「圧縮」の行動に移る。

もちろん、在特会のメンバーが、実際にはどのようなイデオロギーの持主であるかは、別の話である。ただ、民主党政権を「寛容すぎる」と捉えたことは、確かだろう。「なぜ話し合う余地がないかと言ったらね、民主党が政権取っちゃった。この時点で終わっちゃっている」（『週刊金曜日』2011年3月12日号掲載の在特会会長・桜井誠へのインタビュー）。

戦後民主主義の再編成は、思想的には、「平和」「自由」「平等」「民主主義」の意味転換＝解釈転換が伴っていた（その総体が新自由主義）。詳述はできないが、一方においては、「受動的な『専守防衛戦略』から能動的な『平和創造戦略』へ」（小沢一郎『日本改造計画』）という平和観であり、他方においては、いわゆる「市場原理主義」に照応した「自由」「平等」観（国家の関与の制限、「自己責任」論）である。「民主主義」は、多数決原理に矮小化された。

しかしながら、ナショナリズムの内容を創作するには、幾多の困難がある（だからして、「美しい日本」「たちあがれ日本」などの陳腐な言い方しかできない）。例えば佐伯啓思は、「戦後の徹底したアメリカ化（アメリカ的価値観の受容）を自ら進んで遂行してきた日本において『保守』を唱えることそのものが大きな矛盾を含んでいる」、「日本の歴史的伝統を踏まえた価値とは何か、という問い……に対してあまりに単純で明快な答えを与えることはできないし、またそうすべきでもない」¹⁰と述べている。

在特会は、ナショナリズムの内容においては、おそらく雑多の集団であろう。従って、「反日」なるものを見境なく攻撃するのであり、かつ一種の機動性を持っている。在特会の思考には、反ユダヤ主義者が「ユダヤ人からの解放」を唱えたのに似た論理構造——「反日」的なるものへの脅迫観念がある。在特会は、戦後民主主義において温存・再生産されたわが抑圧民族同胞＝日本人の差別意識に依拠し、「在日」の自由の拡大が日本民族の不自由の拡大であるかに、ねたみを煽っている。彼・彼女らの願望の意味するところは、一面では、戦後民主主義における日本民族の「特権」の護持・絶対化に他ならない（どんなに戦後民主主義を攻撃していても）。そうであれば、日本人労働者は、戦後民主主義の余韻から脱却しなければ、在特会と闘いえないのである。

【注 脱稿後に一読したので内容には触れられないが、『インパクション』2010年最新号は、「現代排外主義批判」を特集している。目を通しておいて損はない。】

¹⁰ 「『保守』が『戦後』を超越するすべはあるのか」 佐伯啓思 『正論』2010年6月号